

機械が繋ぐ人と人之間: 森政弘のロボット仏教哲学から考える

Machine Connecting a Human to a Human: In light of Dr. Masahiro Mori's Buddhist Philosophy of Robotics

木村 武史*¹
Kimura Takeshi

*¹ 筑波大学人文社会系
University of Tsukuba, Faculty of Humanities and Social Sciences

This paper attempts to construct a conversation on the social and cultural significance of robotics between Masahiro Mori's Buddhist philosophy of robot and an economically oriented techno-social philosophy of social robots. The latter implies the mechanization and economic deprivation and alienation of human, which needs to be balanced against Mori's human-centered Buddhist philosophy of robot.

1. 初めに

人工知能を搭載したロボット(機械)が社会の中で果たす役割と意義をどのように評価することができるのだろうか。ロボットが社会へ進出するのを推進しようとするロボット研究者はその肯定的な面を強調するが、否定的な面があると警告する声もある。特に労働の現場では仕事がロボットに奪われるという危機感が強い。そのような面があることを認めつつ、本稿では、社会の人間関係を積極的な意味で変容するであろうロボットの位置を考察することに焦点を当てることにしたい。特に、人と人を繋げる接点としての人工知能搭載のロボットについて考える。ここでは、ロボット工学者であり仏教思想の見地からロボット哲学を構築してきた森政弘の考えを参考として考察する。人と人を繋ぐ機械としてのロボットの意義を経済的「生産性」や労働力の補てんといった価値づけによるのではない、人間中心的立場からの意義付け、伝統的な言語で意義づけることの重要性について考察を加えることにする。

2. 森政弘の仏教的ロボット哲学

本題に入る前に何点か予備考察が必要な点がある。というのも、筆者はロボット工学者ではない立場からロボットの文化社会的意義かつその思想的意義を取り上げているからである。

2.1 ロボット技術に関わる異なる立場

最初に、ロボット技術と人間との関係を捉える幾つかの文脈について考えてみる。

第一に、文化の境界を越える技術と特定の宗教や思想との繋がりとは自然なことではなく、ある社会的条件によって決められてくる、という点である。第二に、機械・ロボットとの関係を考えるに当たっては、製造者、使用者、社会という三つの異なる立場に起因する差異(性差を含む)を考慮する必要がある。第三に、当然ながら、デザイン・製造される機械・ロボットの機能・種類によってもその関係性が変わってくるといえる。そして、第四に、機械・ロボットが一度文化・社会の中で利用されるようになれば、企画・製造者の意図や当初の意図とは異なってくる予測不可能性があるという点である。当初は善なる意図で始めたものが別の意図によって異なる意義を持つてくることもありえる。第二の観点

については、ロボット研究者自身が様々な媒介を通して意見を表明しており、傾聴に値するといえる。

2.2

このように枠組みで考えると、森政弘はロボット工学者であり、仏教の実践家という立場からの仏教的ロボット哲学を構築してきたといえる。第二の観点に属するといえる。他方、筆者はロボット工学者でもないし、人工知能搭載のロボットを利用する使用者でもないが、ロボット工学者やロボットの使用者の考えや感想等を主たる資料として考察を行う立場にある。そして、筆者に関心があるのは、第二と第三の資料に基づいて考察を行う第一と第四の側面である。

2.3 森政弘の仏教的ロボット哲学

森政弘の仏教思想に基づくロボット哲学をここで詳しく述べることはできないが、一つの重要なポイントはロボット工学の観点からロボットを通して生物・人間の理解が深まる、という点である。特に仏教的世界観・人間観がロボットを通して良く分かるという。ロボットコンテストにおいて、ロボット製作に没頭している中学生は『金剛般若経』の世界を経験しているという森の指摘は興味深い。作る対象である機械とそれを作る人間である自己との間に主客の区分がなくなり、物に没頭することによって自己が成長する経験をする事ができているという。

また、森は社会の問題を解決する手段として技術を捉え、同時にロボットを構築しながら人間についての知識と理解を深める。そこからロボットは単なる機械ではなく、人間をも映し出す鏡であるという主張に近い立場に立つ。そして、禅の教えに従いながら、縁起と空の教えの中にロボットを位置付ける。現在のソーシャル・ロボットは森の時代にはまだ十分には発達していなかったため、森の考察の対象には十分なっていないが、仏教の教えの縁起を重視した森の立場から人と人と繋ぐロボットは、縁を生み出し、ロボットを通して人々が仏法に気付く契機となる潜在性を認めるのではないかと思われる。

2.4 革新的技術と伝統的人間観

欧米には、日本のロボット技術には神道的ないしはアニミズム的要素が見られるという議論があるが、森の立場はそれらとは異なる。昨今の日本社会におけるソーシャル・ロボットの導入に関して、あまり批判的な声は聞こえてこないが、それは善・悪を相対的に区別し判断をする文化とは異なる色即是空の文化があ

連絡先: 木村武史、筑波大学人文社会系哲学・思想専攻、
つくば市天王台 1-1-1, Tel&Fax:029-853-4338,
takekimu@logos.tsukuba.ac.jp

るためともいえる。興味深いのは、森の思想は、言い換えると、科学哲学や技術哲学というレベルにおいてではなく、一般の日本社会に生きる人にもロボットの意義を文化的に馴染みのある言葉で理解できる道筋を示しつつ、同時に革新的技術の利用方法についての指針も示している点である。

他方、現代日本社会における仏教思想の位置を考えると、森の仏教的ロボット哲学がそのままロボット研究者や社会の一般人に受け入れられるのかという点については考えなくてはならない。そのためには昨今聞かれるロボット技術・人工知能導入の際に用いられる「経済」上の言語に抗うすべを考えるためにも、森の仏教的ロボット哲学の意義は更に深まると考えられる。

3. 人間の技術化・機械化に対抗して

3.1 ロボットの政治的アイデンティティ

ロボット技術をどのように評価するかは立場によって異なる。ロボット技術の導入、それは既に始まっているが、一つには人間の技術化・機械化へと関わってくるのではないかといえる。それは、ドナ・ハラウェイが既に述べたように、人間と機械・ロボットの境界が曖昧化されることにつながり、それは政治的アイデンティティの問題と無関係ではない。表向きは人口減少の社会において経済成長を続けるためにという政治的・経済的理由で進められていることから、第二には、代替可能な労働という意味で人間の仕事を捉えていることが分かる。そこでは、人間の能力・技能は

3.2 ロボット技術の意義の意図せぬ帰結

現在のロボット技術・人工知能の進化は、人間とロボット・人工知能の関係を身体・社会・心理・知能のそれぞれにおいて非境界性を進め、融合が図られているかのように思われる。それぞれの面において有用性が見られることも確かであるが、同時にそれらが人間の在り方にとって持つ意義、また、意図せぬ仕方で行進していることもある。人間の機械化・デジタル化もその一つであろう。

ロボット技術・人工知能そのものは「中立」かもしれないが、それらをデザインし、製造し、利用する人間と社会には意識的なレベルでの意図と価値付けがあるが、同時に意識されない、例えば、まだソーシャル・ロボットが目新しい現状では、人間の中にロボットがいる、という見方を取ることができるが、ロボットの中に人間がいる、という状況が生まれてきたときの人間はいかなる存在となっているのであろうか。ロボットが人間を孤立させるのではなく、人と人を結ぶつけるような形、縁を生み出すように機能する必要がある。

3.3 ロボット技術による人間の疎外

既に述べたように、ロボット化・人工知能技術の発展により人間の仕事が取って代わられるのではという危惧がある。この問題は、一見すると労働力の不足を補う方策と見られるかもしれないが、それだけではなく、ロボットの機能に照らし合わせて人間の能力を測り、更にそこに経済性(あるいは生産性)を読み込もうとするものであり、ロボット技術・人工知能に使われる人間の姿である。ロボット技術と生産性と効率化を当然のように結びつける社会への受容を促す指針には疑問を呈すべきであろう。そして、単なる経済格差ではなく技術格差により、技術を利用できる人が利用できない人を追いやる結果をもたらす可能性がある。ロボット工学者からすればロボット技術が広まり受容されるという積極的な面だけを見て意義を認めると思われるかもしれないが、それ以上の問題についても十分な考察を加える必要がある。

3.4 人間中心のロボット哲学へ

革新的な技術を持つ長期的な意義見出すことは難しい。しかしながら、森の仏教的ロボット哲学に照らして現在のロボット技術・人工知能の開発と社会的受容に関する議論を見てみると、人間の能力を伸ばすことを支援しようとする人間中心の教育ロボット(プロテジェ効果)があることも確かである。また、実際の長期的効果については不確定であるが、高齢者の認知症予防のためのコミュニケーション・ロボットがこれから広がりそうな気配もある。これらの機械が人と人の縁を生み出す役割をも果たすことができるようになれば、重要な社会的意義を持つことになるだろう。

4. 結び

技術の面からすれば最近のロボット技術・人工知能の能力には目を見張るものがあるが、それらが持つ社会的意義については注意深く検討する必要がある。単に役に立つかどうかだけではなく、より深い次元での検討が求められている。

参考文献

- 浅田稔:『ロボットという思想～脳と知能の謎に挑む』,日本放送出版協会,2010年。
Braidotti, R. *The Posthuman*, Polity, 2013.
フォード, M. 松岡訳, 『ロボットの脅威: 人の仕事なくなる日』, 日本経済新聞出版社, 2015年。
Haraway, D.: "A Cyborg Manifesto: Science, technology and socialist-feminism in the late twentieth century,"
Hayles, NK.: *How We Became Posthuman*, The University of Chicago Press, 1999.
森政弘:『退歩を学べーロボット博士の仏教的省察』, 佼成出版社, 2011年。
森政弘:『ロボット考学と人間—未来のためのロボット工学—』, オーム社, 2014年。